

カロンの舟歌

カロンギリヤ神話に出てくる船の用の渡し守

死者の亡霊から1オボロスの小銭を受け取ったというタレントの神曲などに登場

浅黄斑

Madara Asagi



カロンの舟歌

「カロン」ギリシャ神話に出てくる冥府の川の渡し守。

死者の亡霊から1オボロスの小銭を受け取ったという。ダンテの『神曲』などに登場。

浅黄斑

Madara Asagi



浅黄 斑

カロンの舟歌

1996年6月30日第一刷

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店 〒105-55 東京都港区東新橋1-1-16

電話 (03) 3573-0111 (代表) 振替00140-0-44392

印刷所 ㈱清菱印刷

カバー印刷所 真生印刷㈱

製本所 大口製本印刷㈱

〈編集担当 芝田 暁〉

© 1996 Madara Asagi

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN4-19-860507-6

カロンの舟歌

【カロン】

ギリシャ神話に出てくる冥府の川の渡し守。

死者の亡霊から1オボロスの小銭を受け取ったという。
ダンテの『神曲』などに登場。

この書を、すべての優しきがゆえに心寂しき人々に捧ぐ。

I

五月という季節が好きだった。昔のことだ。

長い冬が過ぎ、梅が咲き、桜が開いて、ああ、ようやく春だなあと感じるころに、衣服が一枚一枚、軽くなっていった、いっしょに心も軽くなって……。

五月の、そんな軽さが好きだったのかもしれない。

きれいに抜けた青空が、窓越しに見えた。雲ひとつない上天気。

私は、思いっきり肩をしかめていた。容赦なく鋭い光の針を射込んでくる五月の空は、今の私にとって、ただただ迷惑なだけの存在でしかない。

「ねえ、いらつしやるんでしょう。せのう、さん。いや、瀬尾^{せお}さんか。ちよつと開けて下さいませんか！」
扉が、うるさく叩かれている。そういえば、夢うつつで、ドラムの音を聞いていたような気がする。
明るすぎる空のせいかな、それとも、リズムをまったく無視した打楽器演奏のせいかは分からぬが、
少しずつ正気が戻ってきた。

やはりカーテンをつけねばな……。

最初に考えたのは、そのことだった。酔って足をもつれさせた拍子に引きちぎったカーテンは、そのまま押入のこやしになっている。

枕元に置いたはずの腕時計をさぐり、片目を開けて時刻を読んだ。午前十一時を少しまわっていた。

「お願いしますよ。出てきて下さいよ。せのうさーん。公団のものです。いらっしゃるのは分かっているんですから……」

またガンガンと、扉が鳴る。

頼みもしない目覚ましに起こされただけならまだいいが、スチール製の扉を無遠慮に叩く音は、二日酔いの身には、ひどくこたえる。再び、毛布ごと布団をひつかぶって、きつく目を閉じた。

逃げ去っていった眠りは、ふたたび訪れなかった。穴熊のようにとじこもったぬくもりのなかで、すえた匂いがただけだった。たぶん、幾十晩、幾百晩と、酒臭い息を吸い込み続けた毛布の匂いなのだろう。

——そういえば……。

私は、再び考える。

クリーニングなどということは思いもよらないが、夜具を天日干したのは、いつのことだったろう。

記憶をまさぐった。

たぶん、昨年の秋ごろ。そろそろ肌寒くなってきて、毛布と冬布団を引っ張り出した。そのことは覚えていて。それ以来、この六畳の寝室に敷きっぱなしの万年床だった。

けつきよく、記憶は出てこなかった。

煙草を喫いたくなって、手だけを出して枕元をまさぐった。手に触れたパッケージから、一本抜き出す。抜き出してから、気がついた。このままで、喫うわけにはいかない。

——こりや、いかなあ……。

そう思った。

人間は、いくらでも怠惰になれる。

怠惰に馴れてしまうと、それはそれでけっこう気楽に暮らしていける。だが安逸は底なし沼に似て、これで終わりということがない。

生きていくために、必要最低限の仕事しかないというのが、私のモットーだが、ここまできてしまふと、さすがに、ちよつとまずいんじゃないか。そうも思う。

泥亀のように、布団からはい出た。

公団の男は、あきらめて帰つたようだ。煙草に火をつけ、深く喫い込み、ゆっくり吐き出した。五月の光をゆらりとかき分けて、煙が昇っていく。それを追つた目がしよぼついた。どうにも、まぶしい。

——五月か……。

すると……。

最後にした仕事のことを考える。というより、最後にもらつたギヤラは、いつだったか？

仕事と呼べるほど、立派なものでないことは、私自身がよく分かっている。

——ま、いいか。

最後にもらつたギヤラを思い出したところで、なんの役にも立ちはしない。

すでに、家賃を四ヶ月ばかり溜めている。公団の男は、その督促にきたのだ。つまりは目下、不法占拠中のねぐらだった。

先月までは督促状だけだったが、今月に入ってから、ああしてやつてくるようになった。どんな男

なのか、顔を見てやりたい気がしないでもないが、言い訳を考えるのが面倒くさいという理由で、居留守を決め込んでいる。

人の話では、公団というところは家賃を払わなくても、一年や二年は居座れるらしい。それを確かめてみようというつもりになったわけでもないのだが、こんなふうに安眠をさまたげられるのなら、やはり、なんとかしなければならぬ。

幸いというか、私は今のところ、決して飢えることがないという、素晴らしいスポンサーを持っている。酒だって好きなだけ飲めるのだ。

だが酒が飲め、メシが食えるだけで、男一匹暮らしていける世間ではない。現ナマがなければ、生きてはいけない社会なのだ。

この現ナマについて、もう少しゴタクを垂れさせていただくなら、金の使い道にも優先順位というものがある。

たとえば電気水道に、ガス、電話代。電話やガスは止められたところでなんとかするが、やはり電気と水道は止められると困る。ローソクともしてというわけにもいかないし、こんな場合、水洗便所は始末に悪い。

ちよつとみみっちい話になってしまったが、それが現実だ。

で、働かずに、できるだけ長くすごそうとすると、必然的に家賃を溜めることになる。こちらは電話や電気みたいに、ちよいちよいとちよんぎるわけにはいかないのだ。

ところで――。

私、瀬尾龍平、四十八歳。

東京、武蔵野市にある公団に住んでいる。正確には、公団武蔵野緑町住宅といって、武蔵野市役所

の裏手にあたる。2DK、私同様、ポンコツに近い建物の四階が住居だ。

かつては結婚していたこともあったが、二十年近く前に離婚して以来、酒を伴侶にしながら一人暮らしを続けている。その間、さまざまな職業を転々とし、現在はルポライターののようなことをして、糊口をしのいでいる。

今でこそくたびれ果てているが、十年以上前に『カロンの舟歌』と題する長編小説で、名の知られた文学賞を受賞して、大型新人作家と脚光を浴びたこともある。瀬尾龍平とは、そのときのペンネームだ。

本名らしきものはあったのだが、過去を拗ねる身としては思い出したくもなく、以降、瀬尾龍平で通している。先ほど、音楽的センスがまるでないドラム叩きが、何か口走ったような気もするが、そのことは忘れていただきたい。

自己紹介は、これくらいでいいだろう。

午後三時、私は不法占拠中のぬぐらを出た。階段を下りる。この住宅にエレベーターはない。

途中、井戸端会議中の主婦たちがいた。私の顔を見ると、黙って少し身体をずらした。小さく頭を下げて、隙間を通り抜ける。

階段を下りきったところで、髪を茶色に染めた少年が二人、煙草をふかしていた。一人はケンと呼ばれていて、この団地内で唯一の私の友人だ。

「なんだ。きょうも、学校はサボりか」

確か高校生のはずだが、通学姿を見たことがない。

「おっさんに、言われることあねえや」

「そりゃ、そうだ」

私は苦笑した。

「そのうち、また、やろうぜ」

ケンが後ろから言った。私は手だけを挙げた。

二年くらい前だったろうか。夜中じゅうバイクの轟音が響いて、私は外に出た。一人の少年が、ミニバイクの練習をしていた。マフラーを切りつめているから、音がすさまじい。それがケンだった。注意しても聞かぬので、私はケンを殴った。ケンが応酬して、殴り合いになった。相手が少年だといって、手抜きはしなかった。かろうじて勝ちを制した。

それから一年ほどたって、ケンのほうから再チャレンジを申し込んできた。私は受けた。二度目もどうにか、私の勝ちだった。

ケンは、三度目をやろうというのである。今度こそ負けるだろう。学生時代はアメフトの選手だったし、その後は山での仕事が多かった。体力だけは人並み以上だと自信を持っていたが、もう駄目だ。だが、やはり今度も受けるだろう。なぜなら、ケンはもはや友人なのだから……。

葉を大きく繁らせた桜の木の横に、自転車置き場がある。そこから自分の自転車を引っぱり出した。鍵などかけていないが、盗まれる心配はない。それほどひどい自転車だった。

一分と走らないうちに、五日市街道に出る。もう汗ばむほどの気候だった。

まっすぐ南にいけば、中央線三鷹駅に出るが、街道を東に向けて、ゆっくりとペダルを踏んだ。キークーと後輪がきしむ。日課のように通いなれた道だった。

武蔵野消防署前を過ぎ、成蹊学園前を過ぎ、やがて前方に八幡前派出所が見えてくる。それを右折すると、吉祥寺駅だ。公園通りと呼ばれている。

だんだん人通りが増えてきた。東急百貨店の向かいには、ずらりと銀行が並んでいる。このところ、やや縁の切れている施設ではある。吉祥寺バルコの角のところで、自転車を降りた。

そのままハンドルを押して、角を曲がった。道が細くなるため、自転車に乗ったままというわけにはいかない。

華やかなメイנסトリートとは対照的に、細い小路が迷路のように入り組み、続いている。総菜屋、薬局、飲食店、生地屋、洋服屋……。ありとあらゆる業種が、その迷路のなかに組み込まれている。向かい同士の庇^{ひさし}と庇がぶつかり合いそうなほど狭い小路を、自転車を押しながら曲がり、また曲がりしながら進んでいった。

『ハモニカ横町』という。

まさにハモニカの吹き口のように、小さな店舗が、隙間もなく押し合いへし合いしている。

私がこの横町に初めて足を踏み入れたところから、ここはハモニカ横町と呼ばれていた。だがそのついで少し前までは、その名もずばり『ヤミイチ』と呼ばれていたそうだ。その名からも知れるように、戦後のブラックマーケットが、そのまんま残った横町だった。

小ぶりの赤提灯^{ちやうちん}が、ずらずらつと軒先にぶら下がっている小汚い店がある。赤提灯はぜんぶで十七個あるのだが、うち三個は奇妙にひしゃげて、竹ひごが飛び出している。それに、これは夜にならないと分らないが、中に仕込まれた電球が、昨夜現在で九つ切れていた。いや、昨夜現在というより、正確には今朝の午前三時現在だ。

小さく凹形に切られた露地に、ゴミ箱と一緒に電飾看板がしまわれている。看板は真っ赤な地に一筆書きふう^しに『居酒屋 志乃』と書かれているはずだ。それがこの店の名だった。

いつもなら、その看板を引っぱり出したあとに、自転車をむりやりねじこむところだが、きょうは

違った。

引き戸を開き、内側にかけられた縄のれんをくぐる。

「あら、おっはよー！」

相変わず、明るいおかみの声が出迎えてくれた。店ではシノちゃんに通っている。

名前は忍しのぶというのだそうだが、これはたぶん、本名ではない。年齢は二十九歳。ただし七年前にはじめて会ったときにも、そう言ったし、今年に入っても、しゃあしやあとそう答えている。

「てんぶら油、ないか」

「あるけど……。どうして？ てんぶらが食べたいの？ きょうはヒジキと、小さいもの煮っ転がし。それから……」

シノちゃんが顎をしゃくったテーブルに、すでに私の朝食兼昼食が待っていた。そう、この店が、というより、このシノちゃんが、私の素晴らしいスポンサーなのだ。

「そうじゃない。自転車が油ぎれらしく、ヒーヒーよがり声を上げるんだ」

「あら、うらやましい。あたしも龍りゅうちゃんに乗っかってもらって、ヒーヒー言いたいわん」

巨体をくねらせながら、てんぶら油の徳用瓶と、雑巾を一緒に渡してくれた。

自転車にてんぶら油が利くものかどうか、疑問はあったが、ベアリングのところにつっかけてから、ペダルをまわすと静かになった。久しぶりに仕事らしい仕事をした気がした。

誤解がないように断っておかねばならないが、シノちゃんと私の間には、肉体の関係はない。断じて、ない。

なぜ、これほどに力説するかというと、シノちゃんは、正真正銘の男なのだ。つまりオカマである。いや、ゲイというべきか。

女装をしているわけではない。嘘か本当かは知らないけれど、シノちゃんは柔道三段の腕前だそう
だ。声も野太い。腕も太い。おまけに、百七十四センチある私より上背があり、おそらく体重も十キ
ロの差ではきかない重量級だ。

シノちゃんがその気になれば、私の貞操は、もしかしたら危ないかもしれない。だが幸いにして、
この七年間、私たちは清い関係を保っている。

自転車と看板を交換して、店内に戻ったときには、ドンブリ飯が湯気を上げていた。

「あ、そうそう」

カウンターに入って、味噌汁をつぎながら、シノちゃんが言った。シノちゃんの作る料理はちょっ
としたもので、それがこの店をはやらせている。

「さっき、龍ちゃんを訪ねて、人がきたわよ」

「俺を……？」

来客など、たえて久しい。

「誰だ？」

一応は手を合わせてから、箸をとった。もしかしたら公園の男かとも考えたが、この店を知ってい
るはずがない。

「龍ちゃんには、いちばん縁のなさそうな人よ。もうちいっと年くつてたら、やきもちやいて、水ぶ
っかけてやったんだけど」

「……？」

「若い美人よ。そう、あれで、はたちかそこらかしらね」

「美人というからには、女か？」

「くやしいけど、女よ」

顎を少ししゃくするようにして、流し目をよこした。

誰だろう？ まるで覚えがない。

「でも、なんだって、この店に……？」

もうひとつ、事情が分からない。

「龍ちゃんが書いた記事持って、訪ねてきたのよ。宣伝してくれちゃって、ありがとね」

シノちゃんが、味噌汁といっしょに、週刊誌を持ってきた。

「ほら、この記事よ。下町グルメ散歩？ 下町ってところだけ、よけいだけどね」

「……？」

埋め草のような囲み記事は、『吉祥寺ハモニカ横町の居酒屋志乃』と題されている。文末に括弧つきながら、瀬尾龍平の名もある。肩書きは、作家になつていた。さて、こんなもの、いつ書いたわけ？ 食事をとりながら、斜めに走り読む。それから、週刊誌の表紙を見た。ごく最近の号だ。

「そこに、龍ちゃんが、自分も常連だって書いてあるじゃない。で、ここを訪ねてきたのよ。龍ちゃんの、隠れたファンじゃないの？」

「ふむ……」

ようやく思い出した。

昨年の暮れだったか、しばらく冬眠生活に入るという理由で、私はつき合いのある出版社をまわった。責任感や義務感で、わざわざ断りを入れにいったわけではない。未払いの原稿料をせしめることが、主な目的だった。

なかには連載のような仕事もあったが、冬眠中の分は、まとめて原稿を入れるということにした。

ただし、入稿時に稿料と引き替えという条件をつけた。

「じゃ、このさい、連載は打ち切りましょう」

ケツの穴の小さな編集者もいるにはいたが、

「仕方ねえな」

太っ腹の奴もいた。

で、私も奮発して、一晚で二十本分の原稿を書き上げた。週刊誌で、ほぼ五ヶ月分だ。冬眠に入る熊が、ごっそり木の実を集めるように、できるだけ実弾を仕込んでおこうというのが、正直なところだ。

だが、いくらでたらめな私でも、二十本を一晚で書くとなると、少し苦しかった。私にはとっていきの、できれば人にはあまり教えたくない、この店のことまで書いてしまったのは、そんなわけだ。あのと渡した原稿のひとつが、今になって陽の目を見たわけだ。

そうか、もうあれから五ヶ月か……。すると、そろそろ原稿のストックも切れるころだ。あれが自分の最後のギャラだったと、改めて思い出し、このままじゃいかなあと思ったことを心に浮かべ、

「で、なんだって？」
なおかつ、飯をかき込みながら、尋ねた。

「なにが……？」

「だから、その、はたちくらいいの、美人が、俺になんの用だったんだ？」

「知るもんですか」

シノちゃんは、とんがって見せた。

「嘘を、つけ」

私は言った。

「小鼻が、ふくらんでるぞ」

シノちゃんは、ハハハと男の声で笑い、

「龍ちゃんが、どこに住んでいるのか知らないかって……」

「教えたのか？」

「その週刊誌を、くれるっていうからね。市役所近くの、団地に住んでるらしいと教えといたわ。もうすぐくるから待っときな、って言つといたほうがよかったかしらね」

「名前は……？」

「女の名前なんか、知りたくもないわ」

「ふん……」

大切なスポンサーを、これ以上追及することはやめた。

一時間後、私はシノちゃんといっしょに、ねぎまや砂ずりの仕込みをはじめていた。

鶏肉と白ネギを、かわりばんこに串に刺していく。これが終わると、関東だき用のすじ肉を串に刺す。ささやかな、私の好意でしていることで、ただ飯、ただ酒への感謝というわけではない。あくまで心づもりではあるが、いずれは、まとめて支払う気持ちがある。

こういった商売の、営業開始までの手間というのはいへんなもので、客でいるにかぎるというのが、私の正直な感想だった。

「そろそろ、ぶらぶらしているのにも、あきてきてな」

私は、そんなふうに仕事再開の意志を告げた。